

やきもの随想

鈴木淳司
(衆議院議員)

やきものの魅力にとりつかれて久しい。とは言え、やきものの街・瀬戸に生まれ、子供の頃から周囲にやきものがあたりまえに存在した自分が、やきものの魅力にあらためて気付かされたのは、かつて松下政経塾に在籍した当時、地域振興の勉強で全国各地を巡っていた頃のことで、決して早いことではない。それまでは、やきものの代名詞「せともの」の名の起源たる窯業都市に居ながらも、陶器と磁器の違いすら明確に説明できぬほどであったので、決して自慢できるものではない。しかしながら全国各地を訪ねるうちに、自分の街のアイデンティティを強く求めるようになったことが、振り返れば、自分があらためてやきもの・とりわけ茶陶に深い関心を持つ契機であったように思う。

夜遅く帰宅して、深夜の静まりかえった部屋で、気

さらには黄瀬戸に至った感があるが、最近では無施釉陶の極致、伊賀・信楽にとりわけ強く惹かれるようになった。もちろん、素朴な灰釉、伝統の古瀬戸の魅力も忘れずにはいかない。

多忙な日常の中、わずかでも茶を点て喫する機会があれば、最高の気分転換、まさに贅沢な時間である。その昔、戦国後期・桃山時代から江戸初期に至るまで、茶陶文化の隆盛なところは、茶碗一つ国一つの時代があったが、たしかに歴史上の名碗といわれるものには、それを納得せしめる存在感があるのも面白い。

我が家には、これまであちこちで求めた百五十をゆうに超えるやきものがあるが、その中でも特に自分が大切にしている作が何点かある。中には著名な作家の作品や歴史的価値のあるものもあるが、その反対に、何年前かのせともの祭りの露店で手に入れた、名もなき若手陶工の作の類もある。近年ではようやく、価格や名声に左右されることなく、自分の感性でいいと思えるものはいいと心底思えるようになったのがうれしい。

昨今は女性誌にやきもの特集が必ずと言っていいほど生まれ、やきもの産地を訪ねる若い人も増えたとし、専門誌も創刊され、自ら作陶にチャレンジする人も格段に増

入った茶碗や花器を何点も取り出してきて、一人おもむろに箱の紐を解き、時の経つのも忘れてゆっくりと、まるで赤子を抱くかのように掌の中でじっくり愛でる姿は、もし知らぬ者が見たらぞっとする異様な光景かもしれない。しかしながらその時間が、日ごろ多忙なスケジュールに追われる身にとっては、なんとも心安らぐ至福の時間なのだ。

あたたかみのある志野、深い緑釉の美しい織部、茶の緑の映える楽、力強い黒織部、至高の精神性を感じさせる瀬戸黒、静謐な気品をそなえた備前と端正な気高さの黄瀬戸、いずれもその魅力を語り出したら際限がない。

振り返ってみれば、自分の好みも時間と共に変化してきているのが面白い。当初は、志野や織部から入り、その後には黒織部や瀬戸黒に行き、途中、備前や萩に移り、

えている。それにしても、何ゆえにやきものは人の心を捉えて離さないのだろうか。自分なりに解釈すれば、それは土・火・水を要素とするやきものが、天地自然の構成要素たる五行(空・風・火・地・水)の、まさにそのうちの三つ、すなわち極めて生命の根源に近いことに起因するからではなからうかと思われる。

やきものの魅力の一つに、それを焼いた作者の人となりを如実に反映するということがある。実際、同じ釉薬・同じ土を使っても、よくぞこれほどと思うほどそれは各々が異なり、面白いように作者の個性を表すものである。穏やかな人柄の作者の作品にはそこはかとなく和らぎが満ち、豪快な人の作は、それなりに豪放でもある。こんなところにも、やきものの奥深さの一端がある。

やきもの遍歴を重ねるうち、作家はもとより同好の土との交友がずいぶん広がった。郷里・瀬戸は言うに及ばず、全国各地の陶芸家との出会いや陶友との交流は、なんと贅沢な時間である。今ではもうなかなか望むべくもないが、かつて窯場に作家を尋ね、薪窯の火入れを手伝ったり、酒を片手に陶友とやきもの談義に耽ったりしたことは、実に最高の時間であったし、できればそんな時間をこれからも持ちたいとひそかに願っている。